

## 会長退任のご挨拶



OR学会前会長：中央大学 名誉教授 田口 東

本年4月に2年間の会長任期を終えることになりました。任期の2/3は務めました。残る1/3は心身不調のために職務から離れておりました。この間、理事の皆様、特に副会長と庶務理事の方々には大変なご迷惑をおかけしてしまい誠に申し訳ありませんでした。会長を引き受ける際の見通しが甘かったと反省しております。

さて、会長選考委員である元会長大山達雄先生から連絡を受けたとき、漠然とした希望のような形で、学会のさまざまな活動が学会内だけではなく、学会外の興味をもつ方から常に見てもらえるようなホームページを運用したいと考えました。学会内では分野を超えて交流があり、学会の外とも広くつながっていることを期待し、ことさらに構えた情報発信ではなく普段から学会活動の情報が提供されていることが大切であると考えたからです。これには学会内で情報が随時共有されていることも含んでいます。もう一点、データ解析の分野をカバーすることを意識していました。

会長になって徐々にわかってきたことは、「OR学会はかなりヤバイ！」です。機関誌刊行、研究発表会・シンポジウムの開催、さまざまな研究普及活動など、個々の活動は高いレベルで進められています。一方、運営にかかる経費は増加し、会員数は減少しているために、2019年度決算は約800万円の赤字、2020年度予算は約1,000万円の赤字が見込まれていました（会長就任時点）。収支均衡の実現が容易ではないことは当然ですが、これまでの蓄積があるおかげで、この状況が非常に危険であるという感覚が共有されていないように感じました。水源に水がたくさんたまっていても、蛇口を少し開くとあっという間に枯渇するのは待ち行列の基本です。「経営の科学」はどこへ行った？

対面による議論がしにくい状況であったため、学会運営にかかる支出と収入のバランスを調べることから

はじめました。その結果、周年事業の収支、機関誌の編集と冊子体印刷にかかる費用、事務局運営経費、学会がもっている知的資産が活用されていないこと、が気になる事柄でした。これらに対して、サービス低下が起こるような変更（たとえば機関誌を隔月にすること）は考えず、できるだけ情報技術を活かした代替策を考えること、情報が紙ベースで複雑な経路を通るので担当者と事務局に意味なく時間も手間もかかっている点を改善すること、石器時代のような会員管理システムを置き換えること、を主なターゲットにしました。

まとまったのは、学会活動を把握できる中核となるデータベースとそれを表示するホームページを設計して運用すること、お金も扱える標準的な会員管理システムを導入すること、それらに対応するように業務フローを整理することです。攻める方向でいうと、学会内で流通する活動報告がそのまま資料になり、広報にもつながるような情報流通システムを設計し運用することであり、事務局負担の軽減にもなり、会員増強が期待できる広報活動に結びつくことになります。現在、ホームページは担当者による情報更新を随時反映するようになり、ORWikiは復活しています。機関誌は紙媒体からweb閲覧主体に移行しています。経費削減の次のステップとして刊行形態の変更に合わせて編集システム（担当会社）変更の検討が必要であると考えています。赤字は2019年決算▲約800万円、2020年決算▲238万円（補助金込み）、2021年度決算▲328万円のように推移しています。残念ながら会員減少は続いています。

これまで述べた対策は主として環境整備に関することです。これを学会の勢いを取り戻し会員増に結びつける必要があります。それには、データ解析といったこれまで積極的に扱ってこなかった分野をカバーすることが大切であることはいうまでもありません。しか

し、それだけではなく、分野にかかわらず実社会に応用を求める方向の研究が市民権をもつようにする必要があります。また、応用分野の論文（研究）が少ないと昔からいわれていますが、理論系の論文の投稿は多いのでしょうか。力の入った論文は海外の雑誌に投稿される傾向が強いと聞くことがあります。周年事業の一つとして副賞金額が大幅に増額されたのは、OR学会への投稿を促すことがねらいの一つであったと思います。

研究を仕事とする方が学会に期待する大きなメリットは、論文を発表して研究業績を獲得することです。OR学会の論文誌はこの点がうまく機能していないように感じます。歴代の立派な編集委員長の先生方を思い浮かべると、論文誌をどうするかという議論は非常にしにくいものですが、大切な会員サービスの一つであるという観点からの検討が必要であると思います。OR学会会員増の地道な道筋は、情報を得たい人に

webを通して適切な情報を提供して学会活動に参加したいと思ってもらうこと、もう一步踏み込んで研究成果を発信したい人には、スコープの広い機会を、懐を深くして提供することであると思います。

ここに述べたwebに関わるすべての開発は庶務理事鳥海重喜先生の手によるものです。システムの普及は副会長田辺隆人さんをお願いいたしました。休んでいたときの会長業務は副会長田村明久先生に代行していただきました。本当にありがとうございました。新会長の山上伸さんはビジネス界出身であり、ORの応用の重要性ならびに組織の運営に高い見識をおもちです。それに加えて新入社員の頃からOR学会に関係されていてOR「愛」をもっていらっしゃいます。持ち前の、善し悪しを見分ける鋭い判断力と大胆不敵な行動力を発揮されて、学会をV字回復に導かれるに違いありません。山上伸新会長の指揮の下OR学会が発展されることを願っております。